

<原 著>

女子大学生における家族間のコミュニケーションと 家族機能および食行動異常との関連

美根早由里* 伊藤 研一** 橋本 壘*** 嶋田 洋徳****

要 約

本研究では、家族間のコミュニケーションと、家族機能である凝集性や適応性、および食行動異常との関連を、女子大学生を対象に、リニア仮説とカーブリニア仮説という2側面から検討した。女子大学生96名を対象に、コミュニケーション（リニア仮説、カーブリニア仮説）、家族機能（凝集性、適応性）、食行動異常に関する質問紙調査を実施した。結果として、家族機能との関連においては、カーブリニア仮説のコミュニケーションと凝集性および適応性との間に有意な正の相関が認められた一方で、食行動異常との関連においては、リニア仮説のコミュニケーションと肥満恐怖、嘔吐・下剤との間に有意な負の相関が見られた。本研究では、凝集性と肥満恐怖との間に負の相関が見られたことを除いて、家族機能と食行動異常との有意な関連が認められなかったことから、食行動異常の改善を目的とする際は、コミュニケーションを食行動異常と直接関連し合う要因として位置づけ、リニア仮説を採択することが有用であることが示唆された。

キーワード：女子大学生，食行動異常，家族機能，コミュニケーション，円環モデル

問 題

これまで、数多くの研究において、摂食障害の背景にある心理学的特徴が検討されてきた。北川・小山 (2004) によると、摂食障害の病因として、生物学的要因、心理的要因、社会的要因があり、それぞれが複雑に関連して、多次元的に疾病を構成している (Figure 1)。そのうち、摂食障害の心理的要因として、強迫性や完全主義傾向、衝動性の高さ、依存性と自己主張の乏しさ、問題解決能力、対人交流技術の稚拙さ、そしてそれらに伴う自己評価の低さや自我機能の脆弱性などが挙げられている (北川・朝倉・久住・傳田・小山, 2002)。

一方で、これらの摂食障害の発症リスクとなる要因は、摂食障害患者のみならず、女子大学生にも一般に認められる特徴である。たとえば、これらの「個人」の心理的要因のうち、強迫性 (たとえば、杉浦・丹野, 1998)、完全主義傾向 (たとえば、高橋, 2005)、衝動性 (たとえば、中村・守谷・平石・長谷川, 2011) などは、大学生を対象とした研究においてしばしば検討される心理学的変数であり、一般大学生にも認められる心理学的特徴であると言える。また、摂食障害の「社会・文化的要因」である肥満蔑視の風潮は女子大学生にも認められる傾向であり、青年期女性の多くがやせ志向を有していることが、数多くの研究によって示されている (たとえば、渡辺・山沢・佐竹・松井・真鍋・上野・大森, 1997)。このように、摂食障害の発症リスクが女子大学生にも一般に認められるだけでなく、摂食障害の好発年齢は10代後半から20代

*早稲田大学大学院人間科学研究科

**学習院大学文学部

***日本学術振興会特別研究員

****早稲田大学人間科学学術院

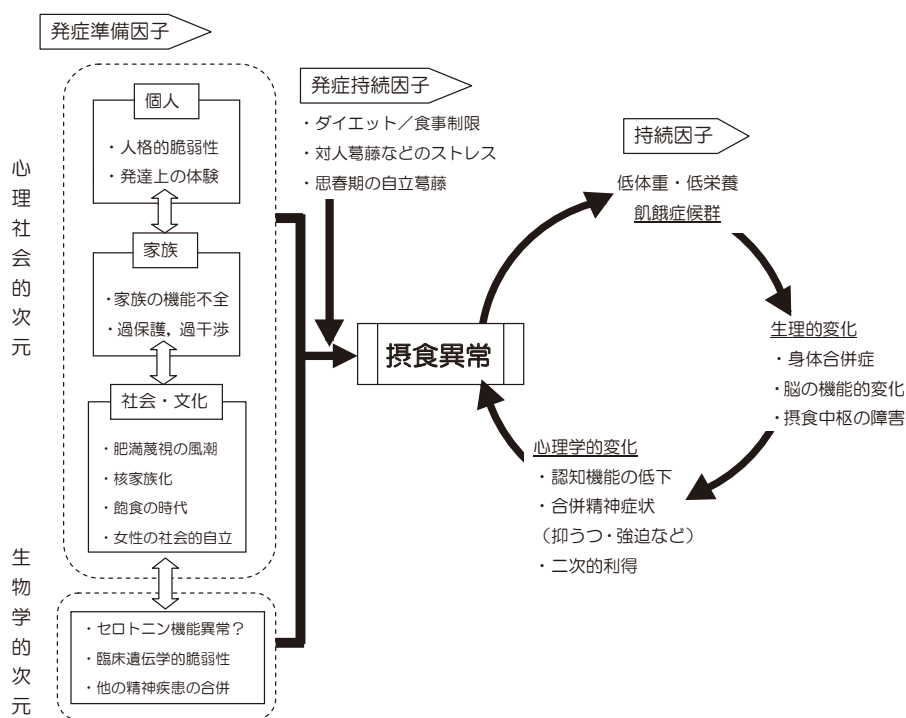


Figure 1 摂食障害の多次元要因モデル (北川・小山, 2004)

前半であり、女子大学生においても、摂食障害患者、もしくは摂食障害を発症するリスクの高い者に特徴的な過食や嘔吐といった食行動上の問題を示す者が多く見られることから (山中・宮坂・吉内・佐々木・野村・久保木, 2000), 食行動異常の研究において女子大学生を対象として検討する意義があると言える。

その中でも、摂食障害発症のリスク因子の1つである「家族」の要因は、これまでも多くの研究で取り扱われてきた。たとえば、Minuchin, Rosman, & Baker (1978) は、神経性無食欲症の家族にみられやすい特徴として、絡み合い、過保護や過干渉、硬直性、葛藤回避、葛藤に子供を巻き込むことなどを挙げている。また、Fairburn, Welch, Doll, Davies, & O'Connor (1997) は、神経性大食症の発症要因として、両親からの高い期待や過干渉といった家族の特徴が見られることを示した。このよ

うな家族の要因が食行動に与える影響は、女子大学生を対象とした研究でも示されている。たとえば、櫻井 (2006) は、女子大学生とその家族との現在の関係について、母親との依存的な関係が食行動と肥満恐怖に、母親への気づかひが肥満恐怖にそれぞれ影響を及ぼす可能性を示唆した。以上のことから、女子大学生の食行動異常を検討するうえで、家族の要因を考慮することは重要であると考えられる。

これらに代表される家族要因が食行動異常に及ぼす影響を検討している多くの研究において、Olson, Sprenkle, & Russell (1979) の円環モデル (Figure 2) に基づいた検討が行われている (e. g., Ordman & Kirschenbaum, 1985)。円環モデルとは、家族療法に関する文献から記述された概念を帰納的に構成した家族機能査定モデルである (Green, Kolevzon, & Vosler, 1985)。Green, Harris, Forte, & Robinson

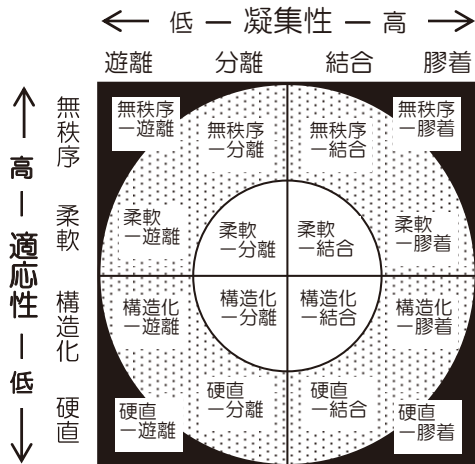


Figure 2 円環モデル (Olson et al., 1979)

(1991)によると、円環モデルは、家族の臨床場面や研究に多く使用されてきており、他の家族システムと比較して、心理臨床、あるいは研究において活発に議論されており、家族療法や家族研究の理論のなかで高く評価されている。したがって、先行研究の知見を踏まえるためには、本研究においても、円環モデルに基づいて、女子大学生の食行動異常に影響を及ぼす家族要因を検討する必要があると考えられる。

この円環モデルにおいては、「凝集性」と「適応性」の2つの概念が、家族機能として重要な役割を担うとされている (Olson et al., 1979)。凝集性とは、家族成員がお互いに持つ情緒的なつながりと定義され、その程度によって「遊離」、「分離」、「結合」、「膠着」の四つのレベルに分類される。また、適応性は、家族の状況的危機や発達の危機に対して家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力と定義され、その程度によって「硬直」、「構造化」、「柔軟」、「無秩序」に分類される。

凝集性と適応性は、摂食障害の研究において家族要因を検討する際にも重要とされる。たとえば、館 (1999) は、摂食障害患者と健常者を対象に、Olson et al. (1979) の円環モデルに基づき、凝集性と適応性の2側面から家族機能

を調査している。その結果、凝集性においては、神経性大食症排出型、およびむちゃ食い障害の患者は、健常群と比較して有意に低い値を示した。また、適応性においては、むちゃ食い障害の患者は、健常群と比較して有意に低い値であった。このように、摂食障害患者における、家族機能としての凝集性、適応性に関する特異性が示されていることから、女子大学生において食行動異常の発症要因を検討する際にも、凝集性と適応性の2側面を考慮する必要がある。

その後の家族機能の研究において、Olson, Russell, & Sprenkle (1983) は、従来の円環モデルで示されていた凝集性と適応性に加えて、「コミュニケーション」の概念を新たに提案しており、コミュニケーションを、家族の凝集性と適応性を促進する次元として位置づけている。Olson et al. (1983) は、家族機能が適切に働いている家族には、共感や自由な意思表示など率直なコミュニケーションが見られるとしている。このことから、食行動異常における家族機能の影響性を検討するうえでも、家族間のコミュニケーションを考慮に入れる必要があると考えられる。

しかしながら、家族機能におけるコミュニケーションの役割については、これまで十分に検討されているとは言いがたく、食行動異常の文脈においても、コミュニケーションが凝集性と適応性を介してのみ食行動に影響を及ぼすのか、食行動にも直接影響を及ぼしうるのかについては明らかにされていない。

また、これまでの研究においては、単純に凝集性および適応性は、両次元が高いレベルほど家族機能がよく働ける健康的な家族であるという、いわゆる「リア仮説」ではなく、中間のレベルを最適とする「カーブリニア仮説」が採択されている (草田, 1995)。このため、コミュニケーションの軸においても、極端に多い、もしくは極端に少ないコミュニケーションは、非機能的に作用する可能性がある。しかしながら、家族機能におけるコミュニケーションの役割に

については実証研究に乏しいため、コミュニケーションにおいても、凝集性や適応性と同様に、中間のレベルが望ましいとされるカーブリニア仮説の適合性が高いか、コミュニケーションの程度と適応指標は線形関係であるとされるリニア仮説の適合性が高いかについては明らかにされていない。

そこで本研究では、発症要因としての家族機能と、食行動異常との関連を、カーブリニア仮説とリニア仮説という2側面のコミュニケーションを考慮し、女子大学生において検討することを目的とする。

方法

調査対象者

都内私立大学に通う女子大学生96名（平均年齢19.97歳， $SD = 1.75$ ）を対象に、質問紙調査を実施した。

測度

1. 食行動異常

永田・切池・中西・松永・川北（1991）の Symptom Rating Scale for Eating Disorders（以下，SRSED；28項目，4件法）の「肥満恐怖」，「過食と食事による生活支配」，「食ることへの圧力」，「嘔吐・下剤」の4下位尺度を用いた。

2. 家族機能（凝集性，適応性）

草田・岡堂（1993）の家族機能測定尺度（20項目，5件法）を，各項目の回答レンジの中央値を3点，両極値を1点として得点を算出した。

3. コミュニケーション

草田・山田（1998）の家族コミュニケーション尺度（18項目，5件法）の合計得点をリニア仮説得点，各項目の回答レンジの中央値を3点，両極値を1点として得点を算出したものをカーブリニア仮説得点として使用した。

手続き

調査は大学の講義終了後に実施された。調査の際には，女子大学生を対象とした調査であることを説明し，質問紙を配布して回答を依頼し

た。また，調査の回答内容はすべて統計的データの作成に用いられ，個人が特定されないことをあわせて教示した。なお，倫理的配慮として，回答は強制ではなく，自由意思によるものであることを，教示として十分に行ない，調査を実施した。

結果

コミュニケーションと家族機能との関連を検討するため，リニア仮説のコミュニケーション得点とカーブリニア仮説のコミュニケーション得点を独立変数，凝集性および適応性得点を従属変数として，ピアソンの積率相関係数を算出した（Table 1）。また，家族機能，食行動異常それぞれにおける代表的な分布の散布図を Figure 3 に示す。その結果，カーブリニア仮説のコミュニケーション得点と，凝集性および適応性得点との間には，ともに有意な正の相関が認められた。一方で，リニア仮説のコミュニケーション得点と家族機能に関しては，適応性においてのみ有意な正の相関が認められた。適応性との関連においても，リニア仮説得点と比較して，カーブリニア仮説得点において比較的高い相関係数が得られたことから，家族機能である凝集性や適応性と，コミュニケーションの間では，カーブリニア仮説得点が，相対的に関連が強いと考えられる。

また，コミュニケーションと食行動異常との関連を検討するため，独立変数をリニア仮説のコミュニケーション得点およびカーブリニア仮説のコミュニケーション得点，従属変数をSRSEDの「肥満恐怖」，「過食と食事による生活支配」，「食ることへの圧力」，「嘔吐・下剤」の各下位因子得点とした相関分析を実施した（Table 1）。その結果，リニア仮説のコミュニケーション得点では，「肥満恐怖」，「嘔吐・下剤」との間に有意な負の相関が認められた一方で，カーブリニア仮説のコミュニケーション得点では，どの項目においても有意な相関が得られなかった。家族間のコミュニケーションと食

Table 1 コミュニケーションと家族機能(凝集性, 適応性)および食行動異常との相関

	凝集性得点	適応性得点	肥満恐怖	過食と食事による生活支配	食べることへの圧力	嘔吐・下剤
リニア仮説のコミュニケーション得点	.07	.31**	-.25*	.01	-.19	-.20*
カーブリニア仮説のコミュニケーション得点	.55**	.45**	-.14	-.13	.01	-.06

** $p < .01$, * $p < .05$

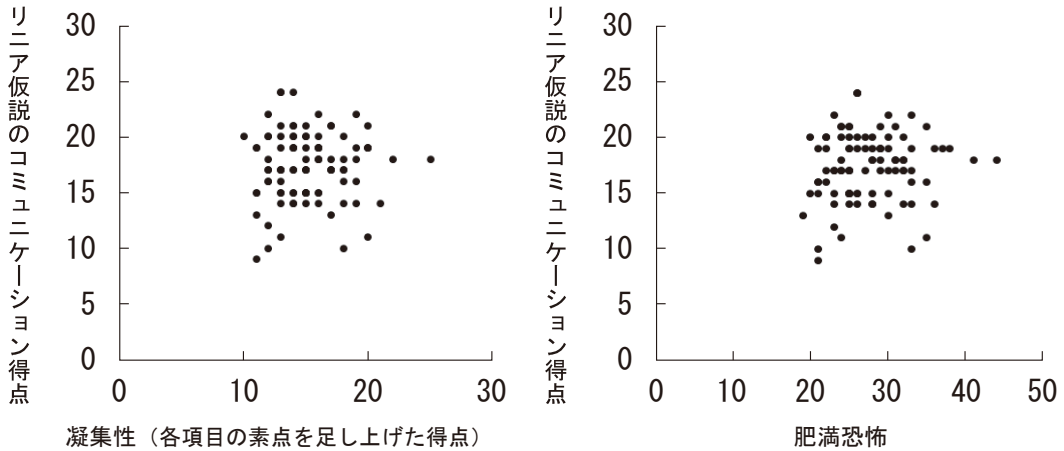


Figure 3 リニア仮説のコミュニケーションと凝集性および肥満恐怖における散布図

Table 2 家族機能(凝集性, 適応性)と食行動異常との相関

	肥満恐怖	過食と食事による生活支配	食べることへの圧力	嘔吐・下剤
凝集性得点	-.24*	-.07	.01	.03
適応性得点	-.11	.00	-.07	-.08

** $p < .01$, * $p < .05$

行動異常との関連については、リニア仮説においてのみ、有意な関連があることが示された。

さらに、家族機能と食行動異常との関連を、女子大学生においても検討するため、独立変数を凝集性および適応性の得点、従属変数をSRSEDの「肥満恐怖」、「過食と食事による生活支配」、「食べることへの圧力」、「嘔吐・下剤」の各下位因子得点とした相関係数を算出し

た (Table 2)。その結果、凝集性と「肥満恐怖」において有意な負の相関が見られたが、それ以外の項目で有意な相関は認められなかった。このことから、女子大学生においては、家族機能である凝集性や適応性と、食行動異常との間には、凝集性と肥満恐怖との関連を除いては、有意な相関は見られないことが示された。

考 察

本研究の目的は、女子大学生を対象に、リスク要因としての家族機能と、食行動異常との関連を、カーブリニア仮説とリニア仮説という2側面のコミュニケーションを考慮し、検討することであった。

まず、コミュニケーションと家族機能との関連を検討した結果、カーブリニア仮説のコミュニケーションにおいて、リニア仮説と比較して、凝集性や適応性との間に強い正の相関が認められた。このことから、良好な家族機能を保つ家族においては、中程度のコミュニケーションが認められることが明らかとなった。この結果は、Olson et al. (1983) に基づき、コミュニケーションを凝集性や適応性といった家族機能を促進する役割として位置づける場合には、極端に多い、もしくは極端に少ないコミュニケーションは、家族機能にとって非機能的に作用する可能性を示す結果が得られた。具体的には、家族間のコミュニケーションが極端に多い、あるいは少ないことで、過度に希薄、あるいは密接な家族における情緒的な繋がりや、過度に移ろいやすい、あるいは柔軟性のない家族システムがもたらされる可能性があると考えられる。

一方で、コミュニケーションと食行動異常との関連を検討した結果、食行動異常のうち、「肥満恐怖」と「嘔吐・下剤」では、リニア仮説において有意な負の相関が認められたのに対し、カーブリニア仮説ではいずれも有意な相関が認められなかった。このことから、家族間のコミュニケーションと食行動異常との関連を念頭に置いた場合は、両者は線形関係であるとみなすことが妥当であると考えられる。

そして、有意な相関が認められた「肥満恐怖」や「嘔吐・下剤」は、他の2つの下位因子と異なり、代償行動を項目に含む因子であり、また、佐藤 (2004) において、摂食障害の重症度評価とも相関が高い因子であることが示されている。このことから、これらの得点の高さは、社会生

活上の機能の障害と関連しており、これらの食行動異常がもたらす機能障害が、結果として家族を含めた周囲とのコミュニケーションを困難にしている可能性がある。

また、女子大学生の食行動異常を扱った本研究において、家族機能と食行動異常との関連を検討した結果、凝集性と肥満恐怖との間に有意な負の相関が見られた一方で、それ以外の項目においては相関が認められなかった。この結果は、本研究のサンプル数が少ないという問題点があるものの、摂食障害患者における、家族機能の特異性を示した館 (1999) とは、異なる知見である。本研究は、食行動異常の重篤度が相対的に低い女子大学生を対象とした研究であるため、この知見の違いから、食行動異常の重篤度の程度が、家族機能と食行動異常との関連の大きさに影響を及ぼす可能性が考えられる。具体的には、食行動異常と家族機能の関係は、食行動異常の程度が低いと「家族の機能不全が食行動異常を導く」という方向の影響性が主である一方で、食行動異常が顕著な場合には、「問題を抱える当該個人が家族を症状に巻き込み、結果として食行動異常が家族の機能不全をもたらす」という方向の影響が強まり、2変数間の双方向性が顕著になることで、家族機能と食行動異常との関連が強まる可能性が考えられる。しかしながら、対象の差異以外にも、館(1999)は食行動異常を医師の診断で分類しているのに対し、本研究は質問紙尺度で測定しているなど、手続きの差異が存在するため、これらの点を明らかにするためには、今後の研究では、同一手続きの条件下において、これらの点が検証可能なデザインで再検討を行う必要があると考えられる。

本研究では、館 (1999) の結果に基づき、家族機能が食行動異常に影響を及ぼすことを想定し、女子大学生を対象に、それらの関係についてコミュニケーションも含めて検討した。しかしながら、女子大学生を対象とした本研究のデータからは、凝集性と肥満恐怖との間に負の

相関が認められたことを除いて、家族機能と食行動異常との間に有意な相関は認められなかった。ともに肥満恐怖との有意な関連が認められた凝集性とコミュニケーションのリニア得点との間に有意な関連が認められないことから、家族機能とコミュニケーションとは、独立に食行動異常と関連し合っていると考えられる。以上のことから、女子大学生の食行動異常を考えるうえでは、コミュニケーションを、家族機能を促進することで食行動異常に影響を及ぼしている変数として位置づけるのではなく、食行動異常と直接関連のある要因として考慮することが妥当であると考えられる。食行動異常との直接的な関連においては、カーブリニア仮説と比較して、リニア仮説が適合することが明らかとなったことから、家族間のコミュニケーションの程度をアセスメントすることが、女子大学生の食行動異常を考慮するうえで重要となる可能性がある。

しかしながら、本研究の限界として、家族間のコミュニケーションと食行動異常との関係について、その因果性は仮定することができないことが挙げられる。つまり、コミュニケーションが食行動異常に影響を与えるのか、食行動異常によって家族間のコミュニケーションに障害をきたすのかは明らかにすることができない。すなわち、家族間のコミュニケーションを促進することが、結果として女子大学生の食行動異常の発症を予防しうるかについては、依然として疑問が残る。今後の研究においては、縦断的調査の方法を用いるなど、その因果性があることの確からしさを高めるような手続きによって、コミュニケーションと食行動異常との関連について検討する必要があると考えられる。また、他の限界点として、本研究の結果では、家族のコミュニケーションと家族機能との詳細な関係性が明らかとなっていない。本研究では、家族のコミュニケーションと家族機能それぞれのカーブリニア得点の間に有意な正の相関が認められ、中程度のコミュニケーションが良好な家

族機能をもたらす可能性が示唆された。一方で、コミュニケーションの少なさ、あるいは多さが、凝集性においては、家族の情緒的繋がり希薄さをもたらすのか、密接さをもたらすのか、そして適応性においては、家族システムの柔軟性の無さをもたらすのか、移ろいやすさをもたらすのかについては明らかとなっていない。家族機能の促進要因としてコミュニケーションを考える場合には、今後の研究において、その関係の方向性を詳細に検討していく必要があると考えられる。

引用文献

- Fairburn, C. G., Welch, S. L., Doll, H. A., Davies, B. A., & O'Connor, M. E. (1997). Risk factors for bulimia nervosa: A community-based case-control study. *Archives of General Psychiatry*, **54**, 509-517.
- Green, R. G., Harris, R. N., Forte, J. A., & Robinson, M. (1991). Evaluating FACES III and the Circumplex Models: 2,440 families. *Family process*, **30**, 55-73.
- Green, R. G., Kolvezon, M. S., & Vosler, N. R. (1985). The Beavers-Timberlawn Model of family competence and the Circumplex Model of family adaptability and Cohesion: Separate, but equal? *Family process*, **24**, 385-398.
- 北川信樹・朝倉 聡・久住一郎・傳田健三・小山 司 (2002). Temperament and Character Inventory (TCI) による摂食障害患者の人格特性の評価および臨床症状との関連 *精神医学*, **44**, 381-389.
- (Kitagawa, N., Asakura, S., Kusumi, I., Denda, K., & Koyama, T. (2002). Temperament and character of patients with eating disorders: An association between personality

- and clinical manifestations. *Clinical Psychiatry*, **44**, 381-389.)
- 北川信樹・小山 司 (2004). 15メンタルヘルスにおける最近のトピックス：摂食障害
北海道医報, **1033**, 18-23.
(Kitagawa, N., & Koyama, T.)
- 草田寿子 (1995). 日本語版FACESⅢの信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究, **28**, 154-162.
(Kusada, H. (1995). The reliability and validity of FACESⅢ for Japanese. *Japanese Journal of Counseling Science*, **28**, 154-162.)
- 草田寿子・岡堂哲雄 (1993). 家族関係査定法
岡堂哲雄 (編) 心理検査学 垣内出版
pp.573-581.
(Kusada, H., & Okado, T.)
- 草田寿子・山田裕紀子 (1998). 家族関係単純
図式投影法の基礎的研究Ⅳ—家族図式に表
現された高校生の家族関係パターンと家族
コミュニケーションとの関連— カウンセ
リング研究, **31**, 10-18.
(Kusada, H., & Yamada, Y. (1998). A
study of figures of family relationships
IV: Relationship between patterns of
family relationships in high school
students and perceived family
communication. *Japanese Journal of
Counseling Science*, **31**, 10-18.)
- Minuchin, S., Rosman, B., & Baker, L.
(1978). *Psychosomatic families:
anorexia nervosa in context*.
Cambridge: Harvard University Press.
- 永田利彦・切池信夫・中西重祐・松永寿人・川
北幸男 (1991). 新しい摂食障害症状評価
尺度Symptom Rating Scale for Eating
Disorders (SRSED) の開発とその適用
精神科診断学, **2**, 247-258.
(Nagata, T., Kiriike, N., Nakanishi, S.,
Matsunaga, H., & Kawakita, Y. (1991).
Development and application of the
new symptom rating scale for eating
disorders (SRSED). *Archives of
Psychiatric Diagnostics and Clinical
Evaluation*, **2**, 247-258.)
- 中村敏健・守谷 順・平石 界・長谷川寿一
(2011). ドットプローブ課題を用いたBIS/
BAS尺度日本語版の構成概念妥当性の検
討 パーソナリティ研究, **19**, 278-280.
(Nakamura, T., Moriya, J., Hiraishi,
K., & Hasegawa, T. (2011). Construct
validity of the Japanese version of
the BIS/BAS scales: A test using a dot-
probe task. *The Japanese Journal of
Personality*, **19**, 278-280.)
- Olson, D. H., Russell, C. S., & Sprenkle, D.
H. (1983). Circumplex model of marital
and family systems: VI. Theoretical
update. *Family Process*, **22**, 3-28.
- Olson, D. H., Sprenkle, D. H., & Russell, C.
S. (1979). Circumplex model of marital
and family systems: I. Cohesion and
adaptability dimensions, family types,
and clinical applications. *Family
Process*, **18**, 69-83.
- Ordman, A. M., & Kirschenbaum, D. S.
(1985). Cognitive-behavioral therapy
for bulimia: An initial outcome study.
*Journal of Consulting and Clinical
Psychology*, **53**, 305-313.
- 櫻井登世子 (2006). 摂食障害におよぼす親子
関係の影響 田園調布学園大学紀要, **1**,
127-138.
(Sakurai, T. (2006). The influence of
perceived parent-child relationship on
the eating attitudes. *Bulletin of DEN-
EN CHOFU UNIVERSITY*, **1**, 127-138.)
- 佐藤 豪 (2004). 摂食障害傾向測定用質問紙
の比較検討：EAT, BITEおよびSRSEDを
用いて 人文學, **176**, 174-164.

- (Sato, S. (2004). A study of the questionnaires for eating disorders. *Doshisha University Jinbungaku (Studies in Humanities)*, **176**, 174-164.)
- 杉浦義典・丹野義彦 (1998). 大学生における非機能的な思考体験の因子分析による分類—強迫観念と自動思考の弁別— 性格心理学研究, **7**, 51-53.
- (Sugiura, Y. & Tanno, Y. (1998). The factor structure of dysfunctional thoughts in college students: Differentiating obsessions and automatic thoughts. *The Japanese Journal of Personality*, **7**, 51-53.)
- 館 哲朗 (1999). 摂食障害患者の家族環境：摂食障害の発症と経過に関係する家族環境因子についての検討 精神神経学雑誌, **101**, 427-445.
- (Tachi, T. (1999). Family environment in eating disorders: A study of the familiar factors influencing the onset and course of eating disorders. *Psychiatria et Neurologia Japonica*, **101**, 427-445.)
- 高橋幸子 (2005). 自己志向的完全主義における自己没入傾向が心理的健康に与える影響 學苑, **772**, 21-32.
- (Takahashi, S. (2005). Effects of self-preoccupation led by self-oriented perfectionism on subjective well-being, *Gakuen*, **772**, 21-32.)
- 渡辺周一・山沢和子・佐竹泰子・松井信子・真鍋良子・上野良光・大森正英 (1997). 青年期女子の体重観と日常生活 東海女子短期大学紀要, **23**, 91-105.
- (Watanabe, S., Yamazawa, K., Satake, Y., Matsui, N., Manabe, Y., Ueno, Y., & Omori, M. (1997). The relationship between adolescent girl's self-image of ideal body weight and their everyday life. *The journal of Tokai Women's Junior College*, **23**, 91-105.)
- 山中 学・宮坂菜穂子・吉内一浩・佐々木 直・野村 忍・久保木富房 (2000). 大学生の摂食障害 心身医学, **40**, 215-219.
- (Yamanaka, G., Miyasaka, N., Yoshiuchi, K., Sasaki, T., Nomura, S., & Kuboki, T. (2000). Eating disorders among college students. *Japanese Journal of Psychosomatic Medicine*, **40**, 215-219.)

The relationships among family communication, family systems, and abnormal eating behavior in female university students

Sayuri MINE *, Ken-ichi ITOH **, Rui HASHIMOTO *.***,
and Hironori SHIMADA ****

* Graduate School of Human Sciences, Waseda University

** Faculty of Letters, Gakushuin University

*** Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

**** Faculty of Human Sciences, Waseda University

Abstract

In the present study, we investigated relationships among family communication, cohesion and adaptability in family systems, and abnormal eating behavior in female university students, on the basis of the linear and curvilinear hypotheses of the Circumplex Model. Ninety-six female university students completed a questionnaire on communication (developed on the basis of the linear and curvilinear hypotheses), family systems (cohesion and adaptability), and abnormal eating behavior. A significant positive correlation was found between family systems and communication as per the curvilinear hypothesis, while a significant negative correlation was found between abnormal eating behavior (fear of being overweight, vomiting, and laxative abuse) and communication as per the linear hypothesis. Examining the relationship between family systems and abnormal eating behavior, the present study found a negative correlation only between cohesion and fear of being overweight. The results show that communication as per the linear hypothesis can be moderated to address abnormal eating behavior.

Key words : female university students, abnormal eating behavior, family systems, communication, the Circumplex Model